

子どもたちの個性が生きる 金融教育

—ワカメ養殖、椎茸栽培など地域の特産物とリンケージしながら—

金融教育の現場レポート

「金融教育」は、社会の中で生きる力を育むことを目的として行われる教育です。このコーナーでは、金融教育の授業がどのように進められているか、教育現場に立つ先生や、授業を受ける生徒の姿をレポートします。今回は、徳島県阿南市立平島小学校の島村孝先生に、現在まで7年間にわたり実践されてきた金融教育についてお話を伺いました。金融教育の果たす素晴らしさが、よく理解できるお話の数々です。

きっかけは15年前

現在、金融教育に積極的に取り組んでいる島村孝先生ですが、そもそもきっかけは15年前にさかのぼるそうです。ちょうど

阪神淡路大震災があった年です。

「当時、私の勤めていた徳島県的小学校で、子どもたちが使う遊具が壊れたのですが、その修繕費がなかったのです。だったら、そのお金を自分たちで何とかしようという事でバザーをすることにになりました。たまたま環境教育の一環で廃油から石鹸を作っていたので、それを

売ることになりました。そのときに、授業中ほとんど話をしない男の子が、サントクロスの袋のようなものに石鹸を詰めて、売ろうと人混みに走って行ったんです。普段はほとんどものを言わない子ですよ。みんなでこうし

て物を売ったりすることで、こんなに熱い思いになれるのかと。これが最初のきっかけですね」

「それと、阪神淡路大震災で大勢の人が亡くなったので募金活動しようという児童会が立ち上がりました。

そのとき、「先生、募金活動をするなら隣のジーンズ工場に行こう」と言うんです。それまで子どもが校外に出て募金することはなかったのですが、子どもには柔軟性があるのだと思います。工場に電話をしたところ、「どうぞ来てくださる」。工場長さんが朝礼で児童会の役員を紹介してくださいと、募金箱へ千円札を入れてくれたんです。そうしたら、ほかの皆さんも次々と募金してくれて、子どもたちの募金と合わせる



徳島県
阿南市立平島小学校
島村 孝 教諭



3人の生徒が挑戦した百貨店での就労体験（02年度、北川小）

と10万円ぐらい集まった。学校外へ出て行くのはスゴイことなんだなと思いましたがね。そのお金は市役所経由で被災地に届けられたと聞いています」

島村先生の15年前のこうした経験は、やがて2002年度から始まった「総合的な学習の時間」により、具体的な金融教育として展開されていくこととなります。

山の小学校から始まった金融教育

2002年度から現在に至るまで、島村先生は毎年テーマ（下表を参照）を選び、継続的に金融教育を展開されています。

「総合的な学習の時間が始まった最初の年は、全児童数が20人の徳島県の北川小学校でした。那賀川の一番上流にある山の学校で、私が担任したクラスも毎年2〜3人という小規模校です。当時、その保護者の方から『都会へ行っても通用する人にならしてほしい』『恥ずかしがらず引込みがほしい』『恥ずかしがらず引込みがほしい』など、要望がありました。それで子どもたちにも就労、仕事を体験させることで、都会と山奥を対比させ、郷土のよさを見つ



け出したい、知らせたいと思うようになったわけです。子どもたちと相談して、百貨店での販売体験はどうかということになりました。その経験は、いずれ自分たちの学校で開かれるお祭りにも生かしますし：」

本当に百貨店で働かせてくれるのか？ 子どもたちは半信半疑ながらも、その気持ちを手紙に託し、徳島のそごう百貨店の店長に送ることにしました。やがて、本部の役員会から許可があり、同百貨店で開催された北海道物産展で販売を体験することに。数百人ものスタッフが並ぶ朝礼で紹介されたり、テレビや新聞の取材もあつてか、3人の小学生はかなり緊張したそうですが、無事体験学習を済ませた後には、目標を達成した満足感が溢れていたと言います。

その後、島村先生は現在勤務されている平島小学校へ移りますが、海に面している地域性なども考慮しながら、次々と新たな取り組みを始めます。環境を勉強し廃油石鹸を販売した03年度、豆腐をテーマに食の在り方を考えた04年度、地域の特産を勉強

しワカメ養殖に挑戦した05年度、那賀川に突然現れたアザラシを調査し自主制作のCDを販売した06年度、ご当地検定で地域情報の発信に取り組んだ07年度、そして日本の食事情を勉強し椎茸栽培やワカメ養殖に取り組んでいる08年度。

実は、04年度を除き、各年度ともモノを作り販売するという取り組みが

島村先生が実践してきた金融教育

年度	学校名	対象	テーマ	内容
2002年度	北川小	6年生	就労をテーマにした学習	全児童数20名の山の学校で、普段は触れる機会が少ない都会の百貨店で就労体験。
2003年度	平島小	5年生	水とのかかわり	環境の視点から「那賀川」を検証し、自分たちでできる水質保全の取り組みから、廃油石鹸を製造し販売するまでを体験。
2004年度	平島小	4年生	食育 大豆・豆腐	大豆の栽培や豆腐の製造過程を学習。その過程でおからを飼料とした愛媛産陸上養殖のアビについても学習。
2005年度	平島小	6年生	郷土を見つめるワカメ養殖	編入合併される町を特産物から見直す体験。「生八つ橋」の製造販売や、ワカメ養殖に取り組みその利益で卒業プロジェクトを実施。
2006年度	平島小	4年生	あごひげアザラシ「ナカちゃん」から学ぶ	地元的那賀川に現れたアザラシ「ナカちゃん」を調査。アザラシの死により曲折はあったものの、最終的にはCDを自主制作し販売。マスコミにも数多く取り上げられる。
2007年度	平島小	6年生	平島公方検定で情報発信	270年間郷土に居を構えた足利氏の末裔・平島公方を調査するとともに、ご当地検定を作成し、地元情報の積極的な発信を体験学習。
2008年度	平島小	4年生	食について考える	異常気象やバイオエタノールなどの影響による食の危機を学習するとともに、椎茸栽培とワカメ養殖を手掛ける。

ワカメの種付けと収穫シーン
('05年度)



適材適所で 支え合う子どもたち

されています。ここに、島村先生の金融教育での、コアとなる考え方が表れています。

島村先生は、こうした金融教育は調べるよりは体験すること、体験するよりは販売することの方が、より実践的であると考えています。ただし、実践に際しては次のような工夫をしてきています。

まず第1は、子どもが興味を抱くものを前提とするものの、これに地域をどう絡めていくかという点です。また、失敗も勉強になります。が、なるべく成功体験を積み重ねながら学ばせたいので、そのためにも地域が持つ優位性を、最初から取り入れる必要性があります。

第2は、きちんとした仕組みの中で学ぶことです。2004年度を除いて、毎回仮想の株式会社を設立。ワカメの養殖の際は、校長先生から1

万円を出資してもらいましたが、子どもたちも200円を出資し50円の配当を受け取っています。出資と配当ということを最初に教え、いかにして利益を出すかという目標を持たせています。

第3は、社会での評価は、相手が買いたいと思う(売れる)という形で返ってくることを理解させることです。実際には、地域の人たちの支えもあって販売できていますが、学校という枠を飛び出して販売するわけですから、会社とどう接点を持つか意識する必要があります。

第4は、利益を出したら社会に還元する意識を持たせること。これまでも、利益から車いすを購入し寄付していますが、こうしたお金の使い方をすることで、自然とお金の使い方の品格を学ぶことにもなっています。

そして、第5が子どもたちの個々の



自主制作したCDと販売利益で寄贈した車いす
('06年度)

能力を引き出すための工夫です。仮想の株式会社を設立するだけでなく、子どもたちの適性にに応じて役割を分担させるために、営業部、宣伝部、製造部という三つの部門を設けています。

「学校の教育課程の中

で学習するときは、算数も国語もここまで達成しなければ」ということが

評価となりますが、ここには違います。引つ込み思案だけでなく帳面なので製造部、活発で少し落ち着きがないけど人当たりがよいので営業部などと、それぞれが個性を





自分たちの会社の通帳
を作るために銀行へ
(*08年度)

発揮しながら自
分の部門で頑張っ
ています。だから、

誰かが誰かの悪口を言ったりすることは
ありません。じゃんけんのグー・チョ
キ・パーと同じで、パーはグーに勝つ
けどチョキに負ける。それぞれのよさが
あってこの会社ができているのです」

**子どもの自発性、
潜在能力はすごい**

こうした教育をやっ
ていると、ときとして
子どもたちは驚くよ
うな行動を取ること
があるそうです。

「廃油の石鹸をいく
らで売るか、子ども同
士で議論になったこと
があります。高くと
たら売れないと言うグ
ループ、環境によいか
ら高くても買ってけれ
ると言うグループ、そ
して苛性ソーダを買
うのかかったお金を



回収するにはこれぐらいの価格にし
なければならぬと言うグループです。
結局、大きさを変えて1個50円と80
円で販売することになりましたが、
当日ある女の子のグループが、売って
いるそばで何かやっている。自分たち
でアンケートを作り、1個80円は高いか
安いかを聞いていたんです。それで帰
りの会のときに『何十人かの人に聞
きました。80円が高いと言った人は、
たった3人しかいませんでした。今度
売るときは80円ですよ』と
言うのです。自分たちの提案が通ら
なかったのが悔しかったのでしょ
うね。

アンケートで、考え方の根拠になるよ
うに客観的なデータを取るとは、ちよ
と私も気付きませんでした。5年生
ですからね」

「それとこれは別の年ですが、自分
たちで販売するものを、新聞の折り
込みチラシで広告をしようと提案し
た子もいました。その子は営業部に
属していましたが、自分で販売店に
電話して、その中の1軒から無料でチ

ラシを入れてもら
える約束を取った
のです。今でも、こ
の新聞の折り込みチラシは、先輩が残
してくれた大切な遺産となっています」
島村先生は熱く語ります。子ども
には秘められた潜在能力があり、信
じて任せると、大人も驚くような力
を発揮すると。金融教育は、こうした
子どもの潜在能力を発揮させる場の
一つでもあるのです。



椎茸の菌床を
水につける子どもたち
(*08年度)

金融教育の現場レポート

**子どもたちの個性が生きる
金融教育**

—ワカメ養殖、椎茸栽培など地域の特産物とリンクしながら—

徳島県

阿南市立平島小学校 島村 孝教諭